

# 及川大工を追って

焦土に響く槌音—間瀬八幡社



第五回

大工として出稼ぐ間瀬の家を、女子供たちは、つましく生活し、留守を守っていたのでしよう。男たちが出立するときの言葉は、「マメ(達者)でオレ(過ごせ)」と「火の要慎」でありました。

浜風は年中、朝と夕に吹き、火をこぼしてしまおうと、大きな火事になり村を焼き尽くすのでした。明治八年の間瀬は、世帯三四六戸、人口二〇三九人でした。お盆の八月早朝、火がこぼれてしまいました。

消失戸数二九三戸、船小屋三二棟、家も漁具も灰になってしまったのです。

弱冠二十七才大工阿部久四郎(久吉)が焼け落ちた生家に立ったのは、九月の中頃でした。火事の頃、彼は青森の兵舎建設の現場でした。

越後のハマが全滅した。のウワサを耳にしました。軍事通信のある現場であったので耳にすることができたのでしよう。久四郎は走りに行きました。焼け跡にうずくまる祖父を発見してもどうすることもできません。父の清蔵は会津に稼いでいました。

懐の有り金を渡し、無一文で現場に戻る他、すべはありませんでした。沿道の瓜や茄子を盗って空腹を満たしたそうです。

咎められても、火事の話をする——ガンバレ——と励ましてくれました。

彼は後に札幌を代表する事業家として成長するのでした。

万延時代、船小屋から出火、百二十七戸焼失、天保には十九戸、そして昭和八年、七十戸以上も焼失しております。

間瀬の人々は火事にもめげず、火事をバネにして出稼ぎ、村を発展させているのです。宿命としては、悲しい軌跡です。

宮山の地に建つ八幡神社は、明治八年、棟梁田中三太郎(光太郎)向拝彫刻、柏木三五平と口伝えされています。

この八幡社は疑問点の残る社であります。

拝殿と本殿がピッタリと収まらない感じ。拝殿に正座し、本殿と対座しても、本殿の厳肅さ、神秘さ、神々さがダイレクトに伝わってきません。

拝殿で正座する目の高さ、本殿の高さがあまりにも違い過ぎました。

す。それだけに、本殿の彫刻が浮かび上がりません。

それに拝殿と本殿の隔りが長過ぎ、彫刻が目に入ってこないのです。これまで素晴らしい間瀬大工の遺構を検証してきた、わたくし

白く洗われ瘦せておりますが、眼の周辺に彩色された金色が残り、鋭い眼玉は青く、わたくしたちを睨むように怖いぐらいです。

海老虹梁彫刻の彫りの深さ、文様柱の文様などは篠原一門の技法です。

先月の広報で掲載しました能生町の明了寺、長野飯山の真宗寺の技法と合致していることに気づいてきました。

これらの寺は吉田神社の棟梁嘉左衛門(重房)の三男、篠原熊三郎(重典)によって完成しました。

口伝される向拝彫刻柏木三五平は誤りである。そんな思いを強くしております。

調査を進めますと、熊三郎は屋号三五平家に養子に行き柏木三五平になったのでした。

明治十八年、間瀬願龍寺も棟梁柏木三五平、赤川惣八によって建立されました。

しかし熊三郎こと三五平は先述の明了寺、真宗寺などを造作中

あります。

これから、三五平は彫刻部分を担当し、全面的な棟梁は赤川惣八だったのではないのでしょうか。

今後、願龍寺の彫刻について調査がまたれます。

八幡社棟梁田中三太郎(光太郎)を追跡調査しても、大工として浮かび上がりません。

わたくしたちの危険な予測ですが、建設当時の間瀬は、明治政府の行政区十六、十七番組に属し、田中三太郎は十六番組戸長でした。大火で焦土となり困窮する状況に氏子(村民)をまとめ、建立に尽力した人物が棟梁として伝承されたのではないのでしょうか。

実質的な棟梁は篠原熊三郎こと柏木三五平でしょう。

幾度となく懐中電灯の明かりを頼って、本殿調査をすすめました。組高欄に不細工に鉄棒による補強修理がみられることから、いつの頃か、氏子たちは強い潮風による傷みを憂い、覆屋による保護、拝殿、本殿の移動による高低変化が生じるとともに、弊殿を新設し、繋いだのではないのでしょうか。

結果的には、全体的に検証すると間瀬大工の伝統的な堂宮技法における感性、感受性な面において大きく損なわれ、神社建築の神々しさ、荘厳さが失われ残念である。

(岩室村生涯学習推進本部)



八幡社拝殿—移動され、建設地も相当に下がったのでないだろうか？